森とともに生きて…森の民のくらし

森下　惠介（奈良山岳遺跡研究会会長）

豊かな森林の恵みを受けて暮らした縄文時代も、けっしてユートピアではありませんでした。東アジアの歴史の動きの中で、稲作農耕、食料生産への道の選択はその後の日本列島の自然環境を大きく急速に変化させることになりました。

縄文文化の終末

縄文時代の人々は日本列島の自然を最も熟知し、自然の恵みを最大限に活用する森の民でした。しかしながら、縄文文化は森の幸の採集を主とし、自然が生み出すものだけに依存したものである以上、縄文時代はけっして豊かで安定したユートピアではありませんでした。

縄文文化の繁栄は地球環境の温暖化と大きな関わりをもっていますが、縄文時代の中期後半、約四千五百年前には日本列島はやや寒冷化し、それまで繁栄した中部高地や関東地方などの東日本の縄文時代の集落数や規模は中期末には激減します。縄文時代は自然環境の少しの変化で、食料事情が良くなると人口が急増し、条件が悪化すると飢饉となり、人口が激減するという過酷な時代だったのです。縄文の繁栄を支えたのは植物質食料の豊かさで、それが一時的に失われると、縄文人の生活は振り出しへ戻るのだと言われています。

その後の縄文後期には、中期に無人状態に近かった（縄文中期の遺跡がほとんど無い）西日本に集落が広がります。この縄文時代後期の西日本の発展の背景には、陸稲、雑穀など焼畑における栽培農耕も想定されているところです。

稲の「細胞の化石」であるプラントオパールは、縄文時代前期の遺跡からも確認されるとされますが、土器についたモミの圧痕で確実にお米の存在が確認できるのは、今のところ、縄文時代後期末ということになります。

縄文時代から弥生時代への移行は、かつては縄文時代晩期になると、狩猟採集に頼っていた野蛮な縄文人が獲物の乱獲によって食料不足におちいり、社会の行き詰まりに伴って、水稲耕作が必然的に導入され、弥生時代が始まるという歴史発展論、進化論的な説明がなされていたのですが、発展ではなく、文化の意識的な選択と見る見方もあります。

縄文時代晩期後半集落の遺跡は、西日本では弥生時代の集落遺跡と重複している場合が多く、あまりよくわかっていませんが、寒冷化による海退は低湿地を拡大させ、日本列島には水田経営に適した環境が生み出されていたのは事実です。

今から二千四百～五百年前（三千年？）、北部九州の沿岸に朝鮮半島から渡ってきた水田で稲をつくる一群の人々が現れます。彼らの渡来の契機は中国の春秋戦国時代から秦漢にかけての動乱、東アジアの民族移動の余波とみる考えが有力です。

彼らは縄文人よりもやや背が高く、面長で扁平な顔つきといった、現代日本人とも共通する容姿で、石製穂摘み具（石包丁）、石ノミ（抉入片刃石斧）など大陸系の石器、ヤリガンナや小刀などの加工用の鉄器、煮炊き用の甕の他、縄文土器に無い貯蔵用の壷、供献用の高杯など新しい形の土器を持っていました。水田稲作農耕という本格的な食料生産が行われる弥生時代の始まりです。

たわわに稔る稲穂

弥生時代以後の日本

水稲耕作は低湿地や谷地形の利用から始まり、以後、農耕地の拡大によって縄文時代に列島の平地を覆っていた森林景観は失われて行きます。耕作による地形の人為的改変が引き起こされ、鉄器の使用もあって平地は見通しの良い農耕地という草地景観へと急速に変化します。水田景観を日本の自然景観と勘違いしている方もあり、「田圃で自然に親しむ」という訳がわからないことをおっしゃる方もありますが、手入れされた水田景観の美しさはさておき、日本列島に広がる水田は弥生時代以後、日本人が営々と作り上げてきた人為的景観、文化的景観であり、日本列島本来の自然景観でないことは確かです。稲は湿潤な気候を要求する点では森林と同じで、極言すれば、日本列島に住む人々は、弥生時代に森林を捨て、種一粒が千倍になる稲という効率の良い草の栽培を選んだのだといえます。

ただ、地域的に見ると、関東・東北地方では弥生時代になっても土器に縄目の「縄紋」を付けるなど縄文文化の伝統を残しており、北海道では稲作が伝播せず、「続縄文」と呼ばれる縄文文化そのものといってよい文化が続き、沖縄でも弥生文化は受け入れられず、縄文文化の伝統をひく貝塚後期文化が形づくられます。

土地と水をめぐる紛争は食料生産とともに弥生時代から始まります。弥生時代の集落は多くの場合、集落の周りに防御施設とみられる濠がめぐっており、石鏃や石剣の刺さった人骨の検出例も弥生時代に増加します。弥生時代の中期になると鏃は縄文時代の狩猟に使用された石鏃よりも大形化し、人の殺傷に適した武器になるとされます。弥生時代という名は、「弥生式土器」の出土地である東京本郷弥生町（弥生ヶ丘）の地名からつけられたもので、早春の三月弥生、農耕が始まるなんとなく牧歌的な感じのする時代ですが、農地化による森林の破壊と戦乱の時代だといっても過言ではありません。

最北の弥生時代水田・垂柳遺跡
（青森県田舎館町）

弥生時代初期集落の防御環濠
（福岡市板付遺跡公園）

水稲耕作は湛水と落水を可能にした圃場と水路を造成し、耕起、田植え、草取りによって稲の栽培を管理するシステムで、生産の増加は労働力（人口）の増加につながり、それはさらなる生産の増加へとつながって行きます。弥生時代に動き出したこのサイクルは社会変化のスピードを早め、やがては弥生時代に続く三世紀後半に集団の利害を調整する政治権力を生みだします。その後の権力による建築・土木材の大量消費は列島の山地の森林植生をも変えていくことになります。